ヤスパースの科学論

馬場喜之

I

「実存哲学」（1938年）という小冊子に次のような箇所がある。

世紀の転回の頃，他の科学と並ぶ一科学として自己を規定した哲学，大学での一専門科学とみなされ，教養の一手段としてうけとられていた哲学が，現実知に対するその余りにも空疎な無内容，また無責任のために，若い世代に与えた大きな深刻な幻滅感をのべたあとで，

「当時，何という情熱が学生たちを襲ったことであろう。かれらは哲学を二三学期やったうちに，自然科学へ，歴史へ，また他の探究諸科学へと入って行った！　ここには諸々の現実があった。——ここには知識欲の満足があった。自然の，人間的現存在の，社会，歴史的生起の，何という目を驚かす，おそろしい，また再び希望をよびさます諸事実よ！　リービッヒが1840年に哲学研究について書いたことが依然としてあたっていた。——，私もまた，この言葉と観念においてかくも豊富な，真の知識と緊密な研究においては，かくも貧弱な時期を生き続けた。それは，私から，私の人生の貴重な二年間を奪った。」① 実存哲学とは主観的おしゃべりのようなものだとおもっている通俗的見解は，むろん論外だが，実存哲学が，たしかに反形而上学でない，と同じくらいに，反科学でない，ということを，この箇所は印象深く語っているものとおもう。

ヤスパース自身，精神病理学 Psychopathologie という一科学領域の研究者としての経歴をもって哲学へとすすんだのであって——精神病理学とはいかなる科学か，ということはまたのちに述べようとおもうし，そのことがこの小論の一つの目的でもあるが——哲学が一科学でないごとく，科学がすなわち哲学であることはないが，科学をふまえてこそ哲学が生きるものであることの自覚において，哲学の再出発の契機をつかむという，いわば哲学史的にみても正統な形態が実存哲学においても打ち出されているわけである。

ヤスパースが科学者において，「単なる認識者」以上の哲学者をみ，またそのことととうらはらのことであるが，そこにほんものの科学者をみとめたのは，マックス・ウエーバー Max Weber においてであった。そしてマックス・ウエーバーは社会科学者であった。

社会科学が，その実践的目標から距離を保ち，イデオロギー的潤色から自己の科学的純粋さを守るということは，社会科学の原則的方法・論理の確立とならぶ大へん困難な課題であるが，そのように科学をまさに生命あるものたらしめる意志の強度の緊張力こそ，マックス・ウエーバーがヤスパースをひきつけた秘密であった。事実と価値，存在と当為とを区別し，そこに科学と哲学の対象領域の差異をみとめるという新カント派の理論と一脈通ずるものをもちながら，新カント派の哲学者

は，講壇の上で価値の哲学を案出するにとどまるに反し，マックス・ウエーバーは波らんと問題の多い社会現象のなかで，事象の客観的科学的認識と価値判断による実践方向とを統一する。そこでは哲学は頭だけでの案出でなく，人格的在り方である。人格と不可分である。

ヤスパースは次のように描破している。「……かれがどんな情熱をもって認識と評価とを区別したかはよく知られている。没価値的な認識がかれにとっては科学の目標であった。かれがたえず自己の評価を明白な意識のもとにおこうとつとめ，評価を一般に認識の対象にすることによって，かれの知的良心がかれの視野を無限にひろめることができた。実際にあるところのものや，合理的な帰結において妥当するところのもの，因果的因子であるところのものや，所与の条件のもとに不可避的に現われるところのものを，錯誤なく認めるということが，かれにとっては，認識のための要求であったのである。しかし，評価と事実についての洞察との区別という要求は，生命に対する無関心や無時間的な主観への逃避とか，<目ざめたままの死>とか，観照的な傍観の枕とかを意味するものではなかった。むしろ，錯誤なき真実の観察ということは，かれにとっては同時に極めて強烈な評価に対する刺戟でもあったのである。統一と完成は，その場合，かれに対する客観的な形象としてでも，またわれわれに対するマックス・ウエーバーの個人的な，経験的な，完成した形姿としてでもなく，むしろ瞬間的な完成した綜合に到達したかれの実存 Existenz のうちにおける生命ある運動としてあったのである。このかれの実存において，かれは評価するに当っては事実性を，事実の説明に当っては可能なる評価を忘れなかったし，また分離されていて関係しておりながら，同時に分離されたままであったものを，たえず相互に関係させたのである。かくしてかれにおいては対立者が無限の動性において結合されたのである。」②

マックス・ウエーバーは学者か，政治家か，という問いがなされ，ヤスパースもまたその追悼論文（1922）③ において，この問い，及びこの問いの限界について言及するところがある。その何れでもない，もっとよく言えば単にその何れかであるというのではないということ，むしろこの二つの在りようを通じ，それを止揚したかたちで，「哲学者という理念に対して新しい充実を与えた」また「哲学的実存に現代的性格を賦与した」ものというのがヤスパースの力説するところである。

マックス・ウエーバーが生きた社会現実は，ドイツ共和制の末期であった。マックス・ウエーバーの死とともに傾くこととなる共和制の政治的イデーに対し，第二のマックス・ウエーバーが何故あらわれなかったか。科学と哲学，学者と政治家との無意味な相反を打破する人間的在り方が何故あらわれなかったか。

ヤスパースの<私の途>は端的に「哲学」に通じ，それは同時に精神病理学の方にこそ（当然のことながら）内的血縁をもつにいたったわけだが，ここに，マックス・ウエーバーとヤスパースとを，ソクラテスとプラトーになぞらえる意味深い分析の理由もある。④

何れにしても，社会科学～社会学は，自己認識が現代において採用しようとする学問的形態である，とヤスパースによって概括されるにいたった社会学の多岐な方法は，マックスウエーバーの創意にまつところ，マルクスと並んできわめて甚大である。

2

科学の歴史をひもどいてみることは大へん魅惑的なことである。そこには人間の幾多の途方もない可能性の開展が示され，推論と行動における冒険，仮設と検証における生命を賭けた大胆さをよみとることができる。

何ごとも理由なくしてはありえない。<科学>についても，特にその理由は関心の的となる。何

故に科学が起ったか。

ところでヤスパースは，このような科学は本来ヨーロッパにのみ固有のものであるという見解から，何故ヨーロッパにかような科学が起ったかという問いになる。「知りうるものを無制限に普遍的に知ろうと欲することとしての科学」「――単に拘束なく暇をかけて従事することとしての科学・単に現存在の目的のための実践的技術としての科学・不可抗的な思想の企てとしての科学，でなく――」

人は普通にギリシャを想起する。ギリシャに科学の萠芽があり，そのあとの発展はここに予告されたのであると。この通例的見解に反してヤスパースは，ヨーロッパの科学がキリスト教～聖書的宗教 die biblische Religion なしにはありえなかったという。⑤つまり，――

神の創造物としての世界は，聖書的宗教によって立つ限り，本質上善であり，従って存在するすべてのものは，それがどんなに小さなものであろうと，また醜いものであろうと，遠くのものであろうと，知るに値するものである。かく人間はもっとも根源的な情熱にもとづいて科学に向うわけであるが，その際認識されたものがそれまで自明的とおもわれていた秩序と矛盾する場合は稀れではないが，科学は既存の秩序を破開してすすむ。安のんな惰眠は許されない。科学は自己のロゴスに基き，未だ非ロゴス的なものの中へと侵入する。しかし他方，この根源的な情熱に基づく行為は，神を＜ためす＞行為であるわけで「認識は神への攻撃」となる。かく，科学の根源においては，神のかたわらにありつつ，神に対して問うという原動力が発展する。それはヨブ以来，ヨーロッパ的思惟を通じて流れているものである°「神の創造物であるあらゆるものへの愛と結合して，誓約しつつも，ひそかに弾劾するこの情熱が，ヨーロッパの科学を生んだのである。」

二三の例を挙げるとすれば，人体の解剖（学）（Vesal, A. Vesalius），水滴の中の微生物の発見（Leeuwenhoek），無意識のリビドーの暴露（Freud）など，みな，この宗教と結びついた人間の，世界に対する愛しながらの弾劾ならざるはない。それはそれ故に本質上未完結であると同時に，無限の未来性を蔵するものである。（哲学は，この科学～宗教の緊密な内的関係の理解なくしては，宙をさまようことになる。）

3

科学を科学たらしめているのは何であるか。世界の全体的な観照，調和的な世界像形成に満足するギリシャ的科学とは異質のものとして，本来の科学としてヤスパースのとり上げる近代科学を，科学たらしめている根本原則は何であるか。

科学一般があるのではなく，もろもろの個別科学がある。大局的な把握をするとしたら自然科学社会科学乃至人文科学，精神科学がある，或いは文化科学，歴史科学という名称も許されるかも知れない，というわけで，それら諸科学に夫々固有なカテゴリー乃至原則が帰属するとしても，すべてに一貫してみとめられるのは，ヤスパースによれば，方法的意識である。⑥

科学は方法知であって，方法の厳密さが，えられた科学知の確実性・強制的普遍妥当性を保証し，またそれの限界の意識をも明瞭にするに役立つ。

ヤスパース自身，このような方法論的意識を貫徹した著作《精神病理学》を書いたのであるが，半世紀経った今日，いみじくもそれが，評価定まれる古典的文献，基礎的学術書となったのである。

精神病理学はいかなる方法論的構造をもち，諸科学の中でどんな地位を占めるものであろうか。

この書物はすでに数版を重ねているものであるが，初版（1913）と戦後版（いま取り上げるのは7版，1959）とでは内容上ややちがいがある。分量的にはほとんど倍加している。いま両者の外形的比較をし，その発展のあとを眺めてみよう。

初版は8章 acht Kapitel から成っている。

Ⅰ　病的精神生活の主観的現象（現象学）

Ⅱ　精神生活の客観的徴候（客観的精神病理学）

Ⅲ　精神生活の連関，　1.　了解的連関（了解的精神病理学）

Ⅳ　精神生活の連関，　2.　因果的連関（説明的精神病理学）

Ⅴ　理　　論

Ⅵ　精神生活の全体：知能と人格

Ⅶ　病像の組立て

Ⅷ　異常精神生活の社会学的関係

これに対し，7版では6部 sechs Teile 構成になり，初版の各章はその中にそれぞれ再編成されることになるが，その模様は大体以下の如くである。

Ⅰ　精神生活の個々の事実

1.　病的精神生活の主観的現象（現象学）

2.　精神生活の客観的作業（作業心理学）

3.　身体的随伴現象及び続発現象としての精神生活の諸症状（身体心理学）

4.　意味ある客観的事実

（表現心理学：世界心理学：作品心理学）

Ⅱ　精神生活の了解連関（了解心理学）

1.　了解連関

2.　特殊機構のある場合の了解連関

3.　病に対する患者の態度

4.　了解連関の全体（性格学）

Ⅲ　精神生活の因果連関（説明心理学）

1.　環界と身体とが精神生活に及ぼす作用

2.　遺　　伝

3.　種々の理論の意味と価値について

Ⅳ　精神生活全体の把握

1.　病像の組立て（疾病学）

2.　種属としての人間の性質形成（形相学）

3.　人生の経歴（伝記法）

Ⅴ　社会と歴史における異常な心（精神病者と精神病質者の社会学と歴史）

Ⅵ　人間存在の全体

目立つことは，初版の das kranke Seelenleben が7版において単に das Seelenleben に Psychopathologie が頻出したところ Psychologie がかわって使われていることである。

またそれに応じて枠組が大きくなった。精神病理学は決して心理学――もちろんこれはゲシュタルト心理学とかのような限定された一特殊心理学を意味するのではなく，アリストテレスの言った〝心がいわば一切である〟die Seele ist gleichsam alles. というような包括的な意味の心を対象と

した心理学のことであるが一に解消吸収されてしまうのではないが，この拡大された意味での心理学は精神病理学にとって不可欠のものとなる。(それの深化はヤスパースにとって，実存照明である。)

〃精神病は脳の病気である〃 Geisteskrankheiten sind Gehirnkrankheiten (Griesinger, 1845) のではない。この啓蒙期的俗流唯物論的見解の誤まりは，すでに明らかであるが，精神における病気とは，単純なる異常概念で説明しきれるものではない。むしろ異常と正常との限界が明瞭でないのが精神病の特徴であり，或いはすすんでいえば，精神そのものの特徴である。このような認識の深化が上のことがらに示されているといってよい。

心理学は，すでに，諸精神科学の中で，デイルタイ W. Dilthey によって，一般精神科学の位置を与えられたが，その具体的内容はいわゆる記述的心理学～了解心理学 die descriptive, verstehende Psychologie であった。

精神病理学においてヤスパースが考える一般心理学は，了解心理学につきない。上記の概観からもうかがえるように，むしろそれより先にあるもっと根底的なものとして，現象学 Phänomenologie をあげている。さらに了解心理学に対しては，説明心理学 die erklärende Psychologie が補足的に対置さるべきものとされる。——

現象学的 Phänomenologisch にわれわれは人間（病者）が実際に体験する精神的なものの諸要素を確定する。

精神的なものの中へ入り込むことによってわれわれは，いかにして精神的なものから精神的なものが出てくるかを発生的に了解する verstehen genetisch。

多くの要素を反覆的な経験の根拠に基づく規則性にてらして客観的に結合することによって，われわれは因果的に説明する erklären kausal。⑦

方法論的構造はもちろん対象に照らして成立してくるものであるが，逆説的にとらえると，方法論の方法的完成は，ここに，新しい，いわば「孵化しかけの」一般心理学を感得せしめる。⑧ 精神病理学と実存照明の間に新しい形での一般心理学をとり出してくることが可能ではないか。

4　（附記）

以上，単なる覚え書きの域を脱せぬが，これを書きながら私の意識の底流にあったものは，科学を起点とする思考が背負っている予想以上の重みである。

現代は科学の時代といわれる。今日では科学はゆきわたっており，誰でもが科学について知っているとおもっている。しかし本当は生半可な哲学の方が，科学よりはるかに容易なのである。

科学をほんとうにものにするということは現代の人間にとってすべてである。すべてのことがそれにかかっている，といわれる。このことは正しい。しかしこのことは，科学への情念が，人間存在全体において占めるところの役割を，正しく省察した上において初めてその真実性を明らかにするものである。

大学が科学の探究を根幹とするという意義も上のパースペクチーフに根ざす地点において正しく把握されるものとおもう。

大学が科学を根幹にするという大学論の歴史は，むしろ新しいものとおもわれるのだが，科学の論理は人間存在の一切の基礎論理につながっていることにかんがみれば，それはむしろ当然起るべき課題である。第三の科学——自然科学，社会科学につぐという意味での——である家政科学をへうぼうする大学の在り方を探究する大学論も，科学の意味を充分に追求することと平行して，しっかりしたみのりある内容をえてゆくものではあるまいか。

注

① Jaspers, Existenzphilosophie S. 4

② Jaspers, Max Weber (in "Rechenschaft u. Ausblick" S. 14)

③ Jaspers, ibid S. 18 ff

④ E. M. Manasse, Jaspers u. Max Weber (in "Schilpp ; Karl Jaspers" S. 354)

⑤ Jaspers, Vom europäischen Geist (in "Rechenschaft u. Ausblick" S. 245)

⑥ 例えば
Jaspers, Vom Ursprung & Ziel der Geschichte S. 111 ; Philosophie u. Wissenschaft (in "Rechenschaft u. Ausblick" S. 204 ff)

⑦ K. Kolle, Karl Jaspers als Psychopathologe (in "Schilpp Karl Jaspers" S. 442 による。)

⑧ 例えば L. B. Lefebre もヤスパースに一般心理学への志向があったとして次の如く概括している。多少重複するが記しておく (L. B. Lefebre, Die Psychologie von Karl Jaspers, in "Schilpp ; Karl Jaspers" S. 467—468)

Jaspers' Einteilung der allgemeinen Psychologie.

I Empirische Einzeltatbestände des Seelischen
- a) subjektive (erlebte) Gegebenheiten
- b) objektive Gegebenheiten
  - 1. Leistungen
  - 2. somatische Befunde
  - 3. sinnhafte objektive Tatbestände : Ausdruck, Sichverhalten, geistige Erzeugnisse

II Zusammenhänge des Seelischen
- a) verständliche
- b) kausale

III Gesamtheiten des Seelischen
- a) der einzelne Mensch
- b) Konstitution
- c) Biographie usw.